

ドイツ・スイスにおける Kinaesthetics 教育システムの視察

杉本 吉恵*¹ 青井 聡美*² 森木 ゆう子*¹
山中 道代*² 網島 ひづる*³ 伊藤 亮子

* 1 大阪府立大学看護学部

* 2 県立広島大学保健福祉学部看護学科

* 3 兵庫医療大学看護学部

2008年 9月16日受付

2008年 12月26日受理

抄 録

Kinaesthetics の教育研修システムや臨床での活用状況を知ることが目的として、「介助における Kinaesthetics」の教育・普及活動が積極的に行われているドイツ・スイスの医療・福祉施設を視察した。

Kinaesthetics 研修の企画・運営、トレーナーの養成を行っている Kinaesthetics 協会や、Kinaesthetics を積極的に臨床に取り入れようとしている訪問看護施設、高齢者ケア施設、障害者生活施設などを見学した。臨床現場への Kinaesthetics 導入においては、Kinaesthetics 協会の研修システムを活用し、施設単位ごとに基本的な Kinaesthetics の考え方とその体験を中心としたベーシックコース、臨床に活用していくためのアドバンスコース研修が行われていた。研修の成果としては、職員の腰痛発症の減少や、対象者の動きを引き出す介助ができるようになり対象者の自立が促進されたことなどであった。なお、看護学基礎教育においては、看護技術のテキストに Kinaesthetics の内容記載はあるが、トレーナーの資格を有する看護教員が不足しているとのことであった。

キーワード：キネステティクス，ケア，教育システム，ドイツ，スイス

1 はじめに

Kinaesthetics は、モダンダンサーであり心理学者で、行動サイバネティクスの博士号を修得した Hatch, F 氏と、臨床心理学の博士号を修得した心理療法士である Maietta, L 氏の 2 人により作り出された。Kinaesthetics とは、「動きの感覚の学習」という意味であり、その語源はギリシャ語の kinesis 「動き」と aisthesis 「感覚」である¹⁾。1974 年頃より Hatch, F 氏が重度障害児童の教育にかかわり、Maietta, L 氏が患者と家族の関係に心理療法士としてかかわっていた²⁾。この中で、患者と家族に身体的接触と共同運動をさせることで両者のコミュニケーションを改善する方法に取り組み、その成果を基に作り上げたセミナー形式の教育プログラムである³⁾。その教育プログラムの中の 1 つにケアの中で行われている活動に焦点を絞った「ケアにおける Kinaesthetics」がある。

看護の分野では、1980 年頃よりスイス人の看護師である Schmidt, S. 氏により、患者の自然な動きを手伝う、あるいは自然な動きを最大限引き出す看護として応用されるようになった⁴⁾。

日本では、2001 年に日本褥瘡学会⁵⁾で Kinaesthetics を応用した体位変換法が紹介され、この言葉が広く知られるようになってきた。2001 年から澤口氏や徳永氏により Kinaesthetics の紹介が始まった^{6,7)} ところであり、研究論文はまだ少ない。

この「ケアにおける Kinaesthetics」とは、介助者の行動能力と動きの能力を開発するセミナー形式の教育プログラムで、このプログラムを介助者が経験することで、結果としてケアの対象者の基本的な活動を効果的に維持できることにつながる。筆者らは、Kinaesthetics ベーシックコース研修会を受講した経験から、Kinaesthetics を活用した介助法は、これまでの介助法と比較すると、介助者の身体的負担が少なく、対象者の残存機能を生かした介助法であり、超高齢化社会の日本において非常に有用な介助法になりうるのではないかと考えに至った。そこで、Kinaesthetics 教育の中心国であるドイツ・スイス両国における Kinaesthetics 教育システムと、その活動状況を知るために、ドイツ・スイスの Kinaesthetics に関連する施設を視察した。

今回の視察結果の詳細を報告するとともに、日本の看護学基礎教育への Kinaesthetics 教育システム導入の可能性について検討したい。

2 視察目的

1. ドイツとスイスにおける Kinaesthetics 教育システムおよび現場での活用状況を知る。
2. ドイツ・スイスで行われている「ケアにおける

Kinaesthetics」研修会に参加し、その教育内容・教育方法から、日本の看護学基礎教育に取り入れることができる内容について検討する。

3 視察日程および施設

1. 日程：2005 年 9 月 26 日～9 月 30 日
2. 施設名：
 - 1) Kinaesthetics institut Deutschland :
ドイツの Kinaesthetics 協会
 - 2) Kath. Sozialstation Josefshaus e.V. Weil am Rhein :
ドイツの訪問看護ステーション
(<http://www.katholische-sozialstation-weil.de/krankenpflege.html>)
 - 3) Katholische Spitalstiftung Horb am Neckar : ドイツの高齢者療養施設 (<http://www.spitalstiftung-horb.de/>)
 - 4) Stiftung Friedheim Weinfelden : スイスの養護学校併設の身体障害者施設
(<http://www.stiftungfriedheim.ch/>)
 - 5) Stiftung Steinegg Geschäftsleitung Standort
"Hausacker" : スイスの障害者グループホーム

4 視察内容

4.1 Kinaesthetics 教育システム

ドイツ、スイスではそれぞれの国に Kinaesthetics 協会が存在し、そこを中心に Kinaesthetics 教育システムが構築されていた。基本的には、「ケアのための Kinaesthetics」を習得するために、介助者自身の動きを理解し、感じることを中心に組み立てられた Kinaesthetics ベーシックコース研修会、Kinaesthetics の概念を理解し、その概念を用いて対象者の動きを分析する能力を育成するための Kinaesthetics アドバンスコース研修会が準備されていた。このアドバンスコース研修会はベーシックコース研修会を修了した者が参加できる研修会となっていた。通常、これらのコースは 3～4 日間で実施されていた。

Kinaesthetics 協会は、Kinaesthetics 紹介コース、ベーシックコースとアドバンスコースの研修会の企画・運営を行い、ベーシックコースおよびアドバンスコース研修修了者に認定書の交付を行っていた。また、Kinaesthetics トレーナーを養成するための研修会の企画・運営も行い、Kinaesthetics トレーナーの認定書を交付しトレーナーの質を確保していた。そして Kinaesthetics トレーナーの活動状況を管理していた。

4.1.1 Kinaesthetics ベーシックコース研修会

スイスとの国境近くにあるドイツの都市で行われていた Kinaesthetics ベーシックコース研修会に参加した。この研修は、訪問看護ステーション内を会場に開

催されていた。

研修には、看護や介護に携わる人を中心に、様々な職種や年代の人々が14名参加していた。Kinaesthetics トレーナーによる6つの概念についての講義が行われた後、小グループに分かれ、グループごとに実技研修を行っていた。

研修項目は、①ベッド上での水平移動の介助、②ベッド上での上下移動の介助、③ベッド上での側臥位への介助、④階段昇降の介助であった。メンバーで対象者と介助者役を設定し、自分の身体の動きを感じ、相手の身体への接触を通して起こる動きの相互作用を確認しながら、上記①～④の研修項目を繰り返し練習していた(写真1)。その際、Kinaesthetics トレーナーが各グループを巡回し、実技のアドバイスをしていた。

4.1.2 Kinaesthetics アドバンスコース研修会の視察

教会を母体とする高齢者療養施設を会場とした研修会を視察した。参加者は、会場となった施設のスタッフ10名程度であった。研修会では、日々ケアしている対象者へのケアで困難な点についてKinaestheticsの概念を用いて分析し、どのような介助方法が良いのかを検討し、対象者に実践する、という形式で行われていた。

実際に視察した場面は、大柄で、身体を動かすことで疼痛が生じる実在の対象者に対するベッド上での水平移動介助場面であった。研修参加者は、Kinaesthetics トレーナーの助言のもと、対象者に疼痛の有無や程度をその都度確認しながら、ベッド上での上下左右への水平移動を介助していた。この過程では、Kinaestheticsの概念を用いて対象者の動きを分析した後、対象者と介助者が共に、対象者の身体の動きや疼痛を確認し、動きを作り出していることが見て取れた。介助される側にもする側にとってもより安全で安楽な援助であった。

以上のことから、臨床の場で、実在の対象者を交えてKinaestheticsの概念を活用した研修を行うことは、研修参加者にとってより実践に即した介助技術の習得につながるだけでなく、ケアを受ける対象者にとって的確な援助を受けられるという利益につながると考えられる。

また、この施設スタッフ70人のうち14人がすでにこのKinaesthetics研修を受けており、順次研修経験者を増やす計画とのことであった。日々のケアは、多くの医療・介護スタッフの連携により実施されるため、施設単位で研修を計画し、スタッフ全体の介助ケアの質を高めていく取り組みがなされていた。

4.2 Kinaestheticsの現場での活用状況およびその効果

4.2.1 訪問看護ステーションの訪問看護の見学

ベーシックコース研修会が行われていた訪問看護ステーションで、Kinaestheticsを学習している看護師と訪問看護の場に同行する機会を得た。訪問看護でのケアの内容は以下の通りであった。

- ①臥床患者への全身清拭
- ②臥床患者の車いすへの移乗
- ③歩行困難患者への入浴介助など。

いずれのケアでも、対象者の身体の動きを援助する際に、Kinaestheticsの「インターアクチオン」、「機能的解剖学」、「人の動き」、「力」、「人の機能」、「環境整備」という6つの概念に基づいた実践を心がけていた。

訪問看護ステーション内でKinaesthetics研修が開催されていることから、ドイツでは訪問看護におけるKinaestheticsの活用効果を期待されていると考えられる。ケア対象者である高齢者の残存機能を維持・活用した介助を行い、少しでも自力で動けるようにし、生活の質の向上をめざすとともに、介助者自身の身体的負担を軽減させることも目指していた。ドイツにおい



写真1 実技演習中の様子

でも高齢化が進み、訪問看護の現場では老々介護の現状がみられる。そのため介助者の役割を担う高齢者の身体的負担を軽減するために、Kinaestheticsを応用した介助技術の導入も求められていると思われた。

4.2.2 養護学校併設の身体障害者施設の視察

Kinaestheticsの概念をケアに導入している養護学校併設の身体障害者施設で、作業療法や理学療法など治療を行っている場面を視察した。その後、同じ施設内にある障害者生活施設においてKinaestheticsを活用した実際の移乗動作を見学した(写真2)。スタッフは両下肢が不自由な入所者の移乗時の動きを確認しながら、その動きを活用し、床からソファ、ソファから車椅子への移動を、直線的な動きと、回旋を加えた動きをうまく組み合わせ介助していた。ベッドから車椅子へ移乗するときは、入所者の上肢や上半身の動きを使って、ベッド上を自力で転がりながら車椅子へ移乗する方法を介助していたが、その動きを支えるために入所者が持ちやすい紐をベッドに取り付けたり、ベッドの幅を広くするなど環境整備が行われていた。Kinaestheticsの概念に基づいた実践を目指していることがうかがえた。また、スタッフと入所者が一緒に、移乗や移動、体位変換などの動きを分析し、介助の工夫を行っていた。

今回の見学担当スタッフおよび施設管理者に、Kinaesthetics導入後のケアやスタッフの変化についての話を聞いてみた。

Kinaesthetics導入の効果としては、スタッフの腰痛が軽減したことと、対象者に対するスタッフの考え方の変化をあげていた。対象者に対するスタッフの考え方の変化とは、「人の動きを介助する上で、対象者自

身の動きにあわせて介助をすることが重要である」と考えるようになったことである。例えば、体を洗うことに対して、“洗う”ということだけでなく、その人がどこまでできるかということをもっと考えるようになった。そして体位変換や移乗・移動動作だけでなく、さまざまな日常生活行動の中の動きの問題を解決する過程でもこの考えを活用しているとのことだった。

Kinaestheticsを導入して困ったことは、介助中、スタッフと対象者の身体が密着することが多くなるので、身体的な密着に嫌悪感を持ったり、周囲の人から誤解を生じる可能性があるということであった。この点に関しては、Kinaestheticsを用いる介助法に関して対象者やスタッフだけでなく、周囲の人に理解を求めることが必要となってくるとのことであった。

さらに、施設全体を通してみると、対象者に対する援助はまだ十分ではなく、課題も残されているが、Kinaestheticsをケアに導入したことにより、対象者が自立の方向に進み始めているので、Kinaestheticsの研修を施設スタッフ全員が受講できるよう研修費用の予算化を目指しているとのことであった。

4.2.3 障害者グループホームの視察

5年前からKinaestheticsを導入している障害者グループホームを視察した。この施設では、定期的にKinaestheticsトレーナーを招き研修会を開いていた。施設で研修会を行うことは、実際に入所者の介助について、スタッフ間で話し合いながら考えることができるという利点があり、その結果をチームで共有しながらケアに役立たせることができていた。

また、スタッフの中に、施設でのアルバイト経験をきっかけとしてKinaestheticsの道へと進んだという建



写真2 対象者自身の移動・移乗時の動きを見守り、介助する施設スタッフ

築家があり、彼はスタッフ達のケア中の気づきを活用して具現化し、入所者が生活しやすいように家屋の改造や使用物品の工夫・改造をしていた(写真3, 4)。そして、一つ一つの気づきを大事にし、生活の中での工夫を重ねることで、より入所者に適した環境を整備することを目指していた。

入所者の一人は、「自分で動く、自分で動く」と楽しそうに何度も繰り返しながら、理学療法の訓練を受けており、Kinaestheticsを活用した介助法が、入所者のやる気や喜びまでにつながっていることを実感することができた。

5 考察

5.1 ドイツとスイスにおける Kinaesthetics 教育システムおよび現場での活用状況

ドイツ・スイスにおける看護学基礎教育における「ケアにおける Kinaesthetics」の教育に関しては、看護学基礎教育のサブテキスト⁸⁾に、「ケアにおける Kinaesthetics」として、介助方法の記載がみられ、看護学基礎教育での教育内容として Kinaesthetics が取り入れられていることが窺えた。教育現場で「ケアにおける Kinaesthetics」は、Kinaesthetics ベーシックコース研修会のトレーナーの資格を有する、あるいは、トレーナーの資格のない看護教員が学生に指導したり、または学生を Kinaesthetics 協会が実施している研修会に参加させたりして教育しているとのことであった。ドイツの 90% の看護学校において、Kinaesthetics が教えられている⁹⁾といわれているが、臨床の看護師

の様子からは広く普及するためにはまだ時間がかかると思われた。

病院や福祉施設などの臨床現場での Kinaesthetics の教育は、Kinaesthetics 協会が実施している Kinaesthetics 研修会を中心にして行われていた。ベーシックコース研修会では、Kinaesthetics の概念について学習を深め、ケアをしている自分自身の動きに着目し自覚できるようにしていた。介助者自身の動きに気付くことで、それが対象者の動きにどう影響しているかを理解できるようになり、結果的に対象者のケアを充実させることにつながるということであった。アドバンスコース研修会では、Kinaesthetics の概念をさらに深く学ぶとともに、施設に実在する対象者への介助について検討する実践的な演習が組み込まれて行われていた。このような実践的な演習は、ケア現場での Kinaesthetics の活用は大いに役立つと思われた。

これらの研修は施設単位で企画・実施され、施設全体でケアの向上を目指すとともに、介助者の身体的負担の軽減も目指していた。今回の視察先では、研修会の結果、スタッフの腰痛が減少したり、対象者の自立が促進されるなど、様々な良い評価が得られていた。日本において移乗や体位変換介助時に腰痛を生じる介護・医療関係者が少なくない。その点では、ケアに Kinaesthetics の概念を導入することは、介助者の安全・安楽のためにも意味があることだと言える。また、介助者だけでなく、何よりもケア対象者自身の自立につながり、そのことが対象者の生活の質を高めることにもつながると考える。



写真3 横幅を1.5倍に広げ、車椅子への移乗を自力で行えるよう工夫したベッド



写真4 対象者の坐位姿勢に合わせて工夫されたトイレ用椅子

5.2 日本での Kinaesthetics 教育システムの導入の可能性

5.2.1 看護学基礎教育

日本では、2006年に初めて看護技術のテキスト¹⁰⁾に Kinaesthetics の概念や看護への応用が取り上げられた。Kinaesthetics ベーシックコース研修会やアドバンスコース研修会が年に数回開かれるようになってきたが、看護教員で Kinaesthetics 研修会に参加している者は少数である。加えて、トレーナー養成のための研修会は日本ではまだ開講されていない。このような状況では、看護教員が学生に「ケアにおける Kinaesthetics」を十分に教授できるだけの環境はまだ整っていないと言えるが、この現状を踏まえた上で、看護学基礎教育で取り入れるべき教育内容について検討してみる。

ドイツ・スイスの Kinaesthetics ベーシックコース研修会では、Kinaesthetics で用いられる概念¹¹⁾である「インターアクション」、「機能的解剖学」、「人の動き」、「力」、「人の機能」、「環境整備」を理解することが中心的な内容であり、体験を通してこれらの概念の理解を促すという学習方法がとられていた。これらの学習内容および方法は、自らの動きを通して人間の動きについての理解を感覚的に深めることにつながっていたと思われる。人間の動きについての理解を深めることは、単なる介助者の介助技術の向上というだけでなく、自分の身体を自力で動かせるという対象者の喜びを知ることにつながり、対象者の自立に向けた全人的なケアの提供を考えていくきっかけにもなると考えられる。

看護学基礎教育における看護技術教育は、ケア技術の核となる考え方およびその基本技術習得を目指し、臨床現場でさまざまな条件の対象者に出会ってもケアを工夫していける力を養うことを目指している。日常生活援助技術や診療に伴う看護技術の土台となる対象者の体位を整える技術や動きを支える技術として、体位変換法や移乗方法などの具体的な介助方法を教授しているが、そのほとんどが介助者のペースで対象者を動かす方法となっていた。看護技術教育では対象者の安全・安楽・自立を踏まえた技術を提供することを原則としているが、Kinaesthetics の概念を取り込み、より一層の対象者の安全・安楽・自立を図る必要があると考える。また、人間の身体の動きそのものの理解を深める機会がほとんどないため、対象者の動きにあわせた介助を習得しにくいと考えられる。そのため、対象者の身体の動きにあわせた介助法を習得するための基盤として、看護学基礎教育の中にケアをしたりされたりした時の自分自身の動きの感覚を通して体験的に学び深める学習の機会を作る必要があると考える。

5.2.2 継続教育

現在、日本においても Kinaesthetics 紹介コースや、

ベーシックコース、アドバンスコース研修会が実施されているが、研修会への参加者は、個人の関心から参加している人がほとんどで、施設単位で研修を行っているところはほとんどないのが現状である。個人での研修会参加者からは、勤務している施設で Kinaesthetics を導入する難しさがあるとよく聞いている。動きを援助する様々な場面において、Kinaesthetics を導入し、ケアの質を上げていくためにも、今後は対象者のケアにかかわる人々全てが研修を受けられるような施設単位での研修の体制を構築していく必要がある。また、研修を企画するためには研修費用の予算化が必須となるが、それを支持できるだけの Kinaesthetics の効果についての検証が日本国内および先進的に進めているヨーロッパにおいても不足している。今後は、Kinaesthetics の効果に関する研究を早急に推進していく必要があると考える。

本視察は、平成 17 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C) 17592219）の助成を受け、「車椅子移乗介助技術の視聴覚教材および指導方法の開発」の研究の一部として実施した。

謝辞

今回の視察は短期間に、ドイツとスイスの各地を 1 日ずつ巡るというハードスケジュールであったが、たいへん貴重な体験や学びを得ることができた。

この視察が実現したのは、Kinaesthetics の創始者の一人である Hatch, F.氏の多大なるご尽力によるところが大きく、心から深く感謝申し上げる。また、各視察施設においては、快く視察を受け入れていただき、スタッフおよびケア対象者の方々にもご協力をいただいたことに深くお礼申し上げます。

文献

- 1) Frank, H., Lenny, M., et al.: Kinaesthetics; 澤口裕二 訳, 看護・介護のためのキネステティック 上手な「接触と動き」による介助. 東京, 日総研, 21, 2003
- 2) 前述 1), 217-218, 2003
- 3) 澤口裕二: さあさんのかかってキネステティック. 東京, 日総研, 122-124, 2003
- 4) 徳永恵子, 塚田貴子ほか: キネステティックを応用したポジショニング. 看護技術, 47: 85, 2001
- 5) 徳永恵子: キネステティック概念を応用した体位変換の実際. 日本褥瘡学会誌, 3: 259-267, 2001
- 6) 澤口裕二, 坂本理和子ほか: リハビリテーション ドイツにおける体位変換 キネステティック概念の紹介(解説). 難病と在宅ケア, 7: 51-53, 2001

- 7) 澤口裕二, 坂本理和子ほか: ドイツにおける体位変換技術の概念! キネステティック概念による介助法の実際と解説(解説). 看護技術, 47: 80-84, 2001
- 8) Olaf, K.: Pflge-techniken von A-Z Schritt fur Schritt in Wort und Bild, Georg Thieme Verlag, Stuttgart, 2.korrigierte Auflage, 170-174, 2003
- 9) 前述 3), 249, 2003
- 10) 徳永恵子, 只浦寛子: 体位変換の新しい考え方 キネステティック概念の看護への応用. 藤崎郁監修, 系統看護学講座専門3 基礎看護学 [3] 基礎看護技術Ⅱ. 東京, 医学書院, 186-231, 2006
- 11) 前述 1), 16-147, 2003

Kinaesthetics training in Germany and Switzerland

Yoshie SUGIMOTO*¹ Satomi AOI*² Yuko MORIKI*¹
Michiyo YAMANAKA*² Hizuru Amijima*³ Ryoko ITO

* 1 School of Nursing , Osaka Prefecture University

* 2 Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare,
Prefecrural University of Hiroshima

* 3 School of Nursing, Hyogo University of Health Sciences

Received 16 September 2008

Accepted 26 December 2008

Abstract

In order to investigate education and training in kinaesthetics and its practical use in clinical situations, we visited hospitals and welfare institutions in Germany and Switzerland. We observed the planning and administration of kinaesthetics training in the association for training trainers, and we also observed the clinical use of kinaesthetics in a visiting-nursing institution, an institution for the care of the elderly, and an institution for the physically handicapped. The training system of the kinaesthetics association comprised two courses for each individual institution: a basic course focusing on fundamental principles and an initial experience of kinaesthetics, and an advanced course focusing on actual clinical applications. Positive outcomes of the training for institutions included a decrease in the onset of lumbago in staff, and increased independence of patients through care which encouraged and supported their movement. In addition, although in basic nursing education, information about kinaesthetics is provided in textbooks of nursing procedures, actual instruction is insufficient because there is a shortage of teachers who are qualified as kinaesthetics trainers.

Key words : Kinaesthetics, care, training system, germany, switzerland